湿原

加賀乙彦
kaga otohiko

上

朝日新聞社

湿原

加賀乙彦

上

朝日新聞社

湿原

上巻

1985年9月30日　第1刷発行
1985年12月10日　第5刷発行

定価＝1,500円

©Otohiko Kaga Printed in Japan1985
ISBN4-02-255391-X
著者——加賀乙彦
発行者—川口信行
発行所—朝日新聞社
編集：図書編集室
販売：出版販売部
〒104東京都中央区築地5-3-2
電話03-545-0131(代表)
振替東京0-1730
印刷所—凸版印刷株式会社

湿原

上巻…目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

指……5
雨……63
原野……109
塔……187
流氷……241
闇……345
壁……457

装画：野田弘志
装丁：菊地信義

指

新宿駅にあふれ出た群衆は、非常呼集された兵隊だ。同系色の背広という制服に身を固め、おのれの会社に奉仕するという共通の目的をもたされ、せかせかと階段を追いたてられていく。思い思いの服装をした女たちも、色彩と個性を失って、影のように男たちにまつわりついていく。

毎朝見なれた光景だが、何度見ても一種の感動を覚える。この群衆はやがてあちこちの会社に分駐し、そこで仕事をはじめる。その仕事がつもりつもってこの世の中が動く。彼らはこの世を動かしている、ちょうど一人一人の兵隊が任務を果せば巨大な戦争となるように。

降りた人が残した空虚の中に、どっと人々がなだれこんできた。車内は満員となり、衣服のへだたりを感じさせぬほどの強い圧力で肉塊が密着してきた。自分も、一つの肉塊として、そのなかにはめこまれている。ひたすら従順に、圧力のままに動かされながら、雪森厚夫は、ふと目の前の男を眺めた。

もう五十に手のとどきそうな、つまり厚夫と同年輩の、脂が乗った紳士である。糊のきいたワイシャツに、真新しい縞ネクタイをしめている。課長か課長補佐という役所(やくどころ)だろう。着ているものに気をくばり、会社でも、そつ無く立ち回っている。きれいに剃られた顎に、いささかの自信がたゆたっている。

大学卒、一流会社勤め、マンション住い、一男一女の父、乗用車を一台所有、給料は……と厚夫は

想像し、自分とは異質な給料生活者を男に見た。男の持っている多くが、彼、雪森厚夫にはない。小学校卒業、自動車整備工、木賃アパートの住人、この年になって未だ妻子なし。

もっとも外観から言ったら、彼も男に負けはしなかった。英国製の背広の生地は男のより上等だったし、デパートで念入りにえらんだイタリア製の絹ネクタイは男のより高価なものだ。ちょっと見た目には、彼だって大会社の課長か、ひょっとしたら重役ぐらいに見えるだろう。

が、厚夫は自分の弱点が手にあることをよく知っていた。この節くれだった指、油で隈取りされた爪は、まぎれもなく自動車整備工の手なのだ。男の、ふっくらとした、労働を知らぬ手との相違はあきらかである。それに厚夫の、骨ばった厚い胸や広い肩は、長年労働に従事したことを示し、背広の要所を無骨にゆがめていた。大体この背広という衣裳は、細い骨を脂肪で覆ったこの男のようなやわらかな肉体に適合するデザインなのだ。

四ツ谷駅について、ふたたび圧力の移動が始まった。圧力のさなかで均衡をえようとしていた厚夫は、急に踏んばって圧力をはねかえそうとした。彼の肩と腕の骨は、隣の男の貧弱な胸にめりこんだ。「イテテテ」と男にしばらく悲鳴をあげさせたのち、厚夫は力をゆるめた。

あやしい気配が、野戦場の殺気のように迫ってきた。脂ぎった紳士のとなりで、今乗りこんできた男が新聞を読みだしたのだが、その素振がどこか不自然だ。目が活字を追っていず、キョロキョロあたりをうかがっている。と、左手にささげた新聞紙の下を、蛇がはうように右手が移動し、紳士の背広にふれると、今度はゆっくりと上昇していき、外側から内ポケットの財布をずりあげていった。財布は内部でするっと脱け落ち、下で待ちかまえていた手ににぎられ、つぎの瞬間どこかへ消えていた。男は何くわぬ顔で新聞を読んでいる。

見事な手腕である。あまり見事なので、厚夫は、よくできた無声映画のシーンでも見るように見ほ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

れていた。男の指がおこなう作業が、うまくいくように、それが誰にも見付からぬようにと念じ、その一刻、男の気持になりきっていた。

スリ仲間では電車の中で仕事をする連中を函師（ハコシ）という。男は函師としても、なかなかの達人と見えた。年のころは五十すぎ、いや、もっといっているかも知れない。完全にサラリーマン風の服装で、出勤途上をよそおっている。男が近付いても誰も不思議に思わないわけだ。しかも機を見るに敏で、乗りこんできた人間がまだ位置が定まらず不安定に押し合いをしている一刻をうまく利用している。紳士が押し合いに気をとられている隙にさっと仕事を終えた。

仕事を隠蔽するために新聞紙をつかうのは〝幕を切る〟といって、古くからある手だ。内ポケットの財布をするのを〝中抜き〟というが、ボタンをはずして指をさし入れるのより、今のように指で財布（ナシ）をずりあげていくほうが、相手の胸を圧迫するだけ気付かれやすく、むずかしい。いったい、この男は何者だろう。

どこかに見覚えのある顔なのだ。どこかで会ったことがある。大型の眼鏡をはずし、ポマードでインクのように光る髪をのけ、坊主頭の素顔にもどし、肌のしわをのばして十五、六年ほど若返らせると、思い当った。府中刑務所の雑居房で一度いっしょになったことがある。名前は忘れてしまったが、みんなに「親分」とよばれていた。

ある日、連行中の看守のポケットからタバコをするつもりが、刑務官手帳をすってしまい、返すに返せないまま発覚して懲罰にかけられた。軽屏禁何日、文書閲読禁止何日とかいうヤツで、独居房に隔離され、退屈させて苦しますという罰である。

懲罰房に行く前にぼやいていた男……思い出した。男の名は銀次、佐藤銀次というので、銀次親分と呼ばれていた……銀次親分はぼやいたものだ。「おれもヤキがまわったよ。タバコと手帳を間違え

るなんて、トウシロウもやらねえドジよ。もう限界だね。四十になっちゃこの商売はできねえ。足を洗う潮時だねえ」

しかし、あれから十五、六年経っても、銀次のやつ、相変らず足なんか洗っていないわけだ。

すられた紳士はまだ気がつかない。きれいに剃られた、自信で張り切った頬をてらてらさせ、見詰められてこそばゆいのか、厚夫のほうへチラと軽蔑のまなざしを向けた。ふん、いくらでも軽蔑するがいい。いまに周章狼狽その極、交番にかけこむ羽目になるんだ。厚夫は復讐を成就した気分になった。自分の内部から、何か凶暴な喜びがせりあがってきた。

それは、ながいこと忘れていた犯罪者特有の感覚だった。不意にむこう側の世界に入りこみ、人々を単なる獲物の群と見ている。社会での地位も年齢も男女の別もなく、人々を裏側から吟味している。内ポケット、カバンの奥、ハンドバッグの底、腹巻に人々が自分の物と信じてしまいこんだ財布、現金、宝石、時計その他が、レントゲンで透視したように見えてくる。

吊り革を握っている右手の人差指の根元にある、古い火傷のあとに目を移した。幼いときのことで、今はかすかな窪みとなっている。何かの犯罪をおかしたとき、ときどきそれを眺めた。自分がこんな人間になった原因がその火傷のあとにあるような気がして、眺めたものだ。

四つぐらいだったろう。ある日突然母がものすごい形相で彼の手を引っつかんだ。いやがる彼は暗い小部屋へ連れていかれた。そこによく店にくる近所のおばさんがいて、二人して左右から彼をきつく押えつけ、右手の人差指に白いものを置いた。母がマッチの火を白いものに近付けた。はじめて彼は事態をさとった。お灸をされるのだ。モグサが燃えさがってきて激烈な痛みが指に来た。泣き叫びながら、なぜこんな苦痛をあたえられるのか分らなかった。ずっとあとで、母は「お前が悪いことをせんようマジナイをかけただ」と言った。

〝悪いこと〟とは、店の柱に吊してあった小銭入れのザルから何枚かの銅貨を盗ったことだという。母にそう言われても盗ったという記憶はない。逆に、それを盗ってはいけないと禁止されたことはよく覚えている。ある日幼い彼は、ザルに手をのばした。おそらく禁を犯す異常な喜びでそれを盗ったことだろう。そして懲罰の記憶と火傷の跡とが残った。

御茶ノ水駅で人が溢れ降りた。ホームに出て、ふと去っていく銀次に気付いた。群衆の間隙をたくみにすりぬけて足早に行くのを、厚夫は追いかけた。

階段の下で「親分」と呼んでみたが反応がない。「銀次親分」と名前を入れると、びくっと肩が怒り、振り返った。しかし立ち止らず、鉄柱のかげに回りこむ。

「やっぱり銀次親分ですね」厚夫は軽く頭をさげた。「雪森厚夫です。府中でごいっしょした」

陰にひたった顔の中で横目が冷たく光った。目は厚夫と同時に売店の女の子をも油断なく見張っていた。

「どなたでしたか……存じませんな、何の御用でしょう」

「用なんか別にありません。昔の仲間にお会いして、なつかしかったものですから」

「存じませんな」銀次は正面をむき、厚夫の顔を上下に二度ねめつけた。「あなたは……」

「雪森厚夫です」厚夫は思いついて名刺を出した。

つぎの電車が入ってきた。ドアが開いたとき銀次は乗りに行くように身をひねったが、電車から流れ出した人々の遮蔽幕につつまれると、肩を落し顔色をなごませた。

「おぼえてるよ、お前を忘れるもんか。しかしよ、おれに何の用だ」

「用なんかねえっていってるだろ」厚夫も昔の同囚言葉になった。「たださっきの仕事っぷりがお見事なんで感心したっていいたかっただけさ」

「ふん」銀次は鼻で笑った。「気がつきやがったかよ」
「気がつくさ。おれの目の前で堂々とやるんだから、剛腹なもんだ。おれが密告したらどうなったと思う」
「お前はそんなことしやしねえよ。知ってたんだ。お前だと。だから、タテに使ってやったんだよ」
タテとは犯行を隠すために共犯を立たせることをいう。
「まさか」
「本当よ。お前だと目星をつけたから、よし、利用してやろうと接近したんだよ。しかし、まさか堅気になったとはな。いつからそうなった」
「ずっとさ。出てからずっとだ。もうすぐ十年になる」
「えらいもんだな」銀次は厚夫の形振をジロジロと吟味した。「相当にやってるようだ。左内ポケットの財布にゃ五万円は入ってる」
「お見通しだね。大体そんなとこだ」厚夫は財布を押えた。
「右内ポケットには手帳か。大分厚い手帳だね。きっと業務日誌ってやつだ」
「まいったね」厚夫は笑い、そのままからかう目になった。「しかしよ、親分。お前たしか足を洗うってたけどな」
「ふん」銀次は鋭くあたりに目をくばった。掏摸係の刑事を警戒する目付だ。「食えないんだよ。だからこの始末さ。しかし、腕は落ちたな、もういかん」
「あれだけ立派にやれればいいさ」
「だめだよ。ときどきドジを踏む。きょうはよ、お前のタテで成功したけどよ」
厚夫は腕時計を見た。八時をすこし回っている。急がねばならない。

「じゃいくよ。また会おうぜ」
階段を登ると銀次はついてきた。トイレの前で立ち止り、「これだよ」と左腕をたたいて片目をつぶった。覚醒剤を注射するということだ。以前銀次が覚醒剤常用者で、左右の腕の静脈という静脈はすべて針のあとでミミズさながらに脹れあがっていたのを思い出した。何もかも昔のままの生活をしているらしい。
改札口のあたりに甲高い声が針をばらまくように響いていた。ヘルメットに手拭覆面の若者たちが三十人あまりスクラムを組み、隊長格の青年が携帯マイクで演説中だ。マイクの性能を越えた音量をしぼりだすため、声が割れて、切れぎれにしか聞き取れぬ。
われわれワア……大学当局ノオ……糾弾する……断乎としてエ……いまヤア……ブルジョア民主主義のオ……欺瞞とデッチアゲウォウ……
厚夫には、最近急に、学生たちが興奮しだしたのがよく分らない。今年の春ごろから、一箇所で火があがると強風であおられたように、あっという間に全国に飛び火し、燃えさかっている。デモ、占拠、団交、乱闘と際限もない、教授や知識人までが学生に与して、新聞テレビは危機感をあおりたて、今にも革命がおこりそうな有様だ。
家の事情で小学校にしか行けなかった彼にとって、中学校以上の学校、まして大学など夢の理想郷なのだが、そんな恵まれた境遇の大学生が何が不満で暴れているのか不可解である。戦争中、陸軍航空整備学校に入ったのが、小学校以後の彼の学歴のすべてだ。が、整備学校でも大学出の者が幅をきかせ、英語物理化学の知識のない彼は大いにばかにされた。大学生なんか彼を差別する特権階級のお坊っちゃんにすぎない。
若者たちの中に女を発見して厚夫はおやと立ち止った。両側の男に肩をだかれて足先など地につか

ぬほど伸びあがっている。華奢な手が白く、指は折れてしまいそうに細い。スクラムが揺れるたびに、ジーンズの中で尻が丸く張って、なまめかしい。覆面で顔は見分けられない。が、全体の感じが、スケート場で知り合った女子学生の池端和香子に似ていた。目の前の女を裸にして、短いスカートをはかせ、リンクせましと滑りまわらせてみる。

ほっそり長い、未成熟を感じさせる脚が、思いのほかの力強さで氷を蹴る。腰を中心にして回転しだす。鋼鉄の刃が透明な光の輪を氷上に浮べて、回る、まわる、マワル。厚夫は、毎週日曜日の朝、インストラクターからフィギュアスケートのレッスンを受けていた。和香子も同じ先生についていて、よく出会うのだった。

その女は和香子ではなかった。厚夫は救われた気持でその場を離れた。学園で騒ぎたてる過激派の学生とスケートをする学生とは違うのだとあらためて自分に言い聞かせた。

勤め人という兵隊どもは黒い川となってだらだら坂を流れ下っていく。このあたりは私立大学が二、三あって学生の姿も混っている。ふと、大通りのむこう側の交番から、暗夜に懐中電灯の光を投げつけられたように、強いまなざしの光を厚夫は感じた。

ごく普通の交番の様子である。ぶかぶかの制帽の、まるで中学生みたいな白面の巡査が立っているだけだ。が、巡査の目は厚夫にぴたりと照準をつけている。彼だけを大勢の人びとから選びだし、一般の勤め人以外の者、不審な男、犯罪者として監視している。ためしに数歩移動してみた。やはり視線が追ってきた。

巡査の前に飛び出していき、「なぜおれを見るんだよ。何か文句があるのかい。そりゃ函師の銀次に会ったさ。会っただけだよ。おれは何もしちゃいねえよ」と叫びだしたい衝動がおこった。ああいう目付、あれが大嫌いなんだ、あの目付を粉砕したい。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com